

第21回石井十次顕彰のつどいの様子

第21回石井十次顕彰のつどいは、椎葉村 綾心塾の綾部 正哉先生をお迎えして記念講演をしていただきました。西小の児童の研究発表や劇も素晴らしい内容で好評を得て終わることができました。



椎葉村 綾心塾長 綾部 正哉先生の記念講演



西小5年生の研究発表

多額のご寄付をいただき ありがとうございます。
厚くお礼申し上げます。

寄付者報告第21号

● 22. 7. 1 ~ 24. 6. 30

篤志寄付

宮崎市 印刷センタークロダ
高鍋町 金田 佳成
宮崎市 藤井 慶一
高鍋町 SSグループ
高鍋町 事務機のフクモト
宮崎市 印刷センタークロダ
宮崎市 印刷センタークロダ
高鍋町 事務機のフクモト
高鍋町 SSグループ

忌明寄付

高鍋町 清 玲子
高鍋町 長 生二
高鍋町 阿部 信秀
高鍋町 新藤 尚代
高鍋町 金田 佳成
高鍋町 森 富佐子
高鍋町 村上 禮子
高鍋町 吉本 香代子
高鍋町 清 充典

(敬称略)

あとがき

今回は第20回になり記念誌を発刊いたしましたので顕彰会だよりは休ませていただきました。昨年は、東日本大震災や、最近では、天候異変による大雨の水害など異変が度重なりお互いの身を守るための方策を常に考えておかないといけないようです。

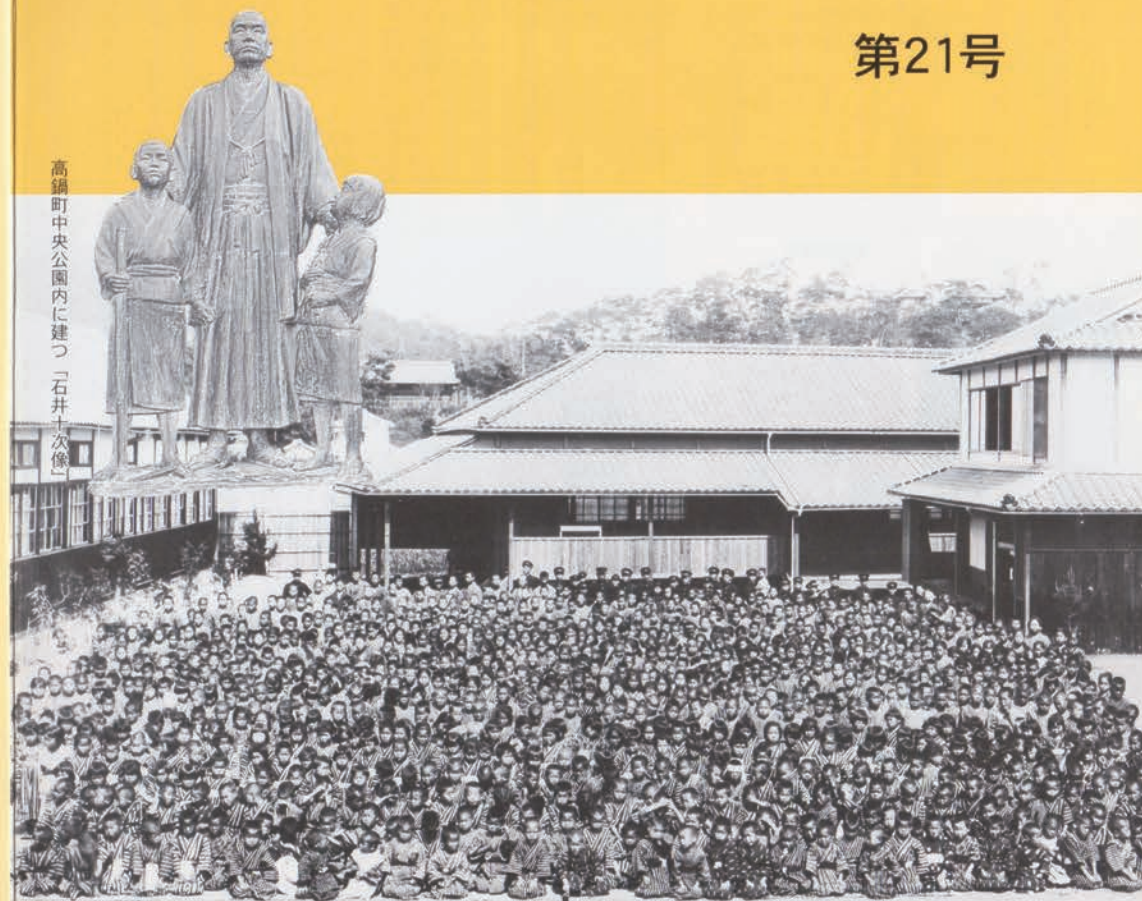
「顕彰会だより」第21号をお届けいたします。

財団法人 石井十次顕彰会

〒884-0006
宮崎県児湯郡高鍋町大字上江8113番地
TEL 0983-23-4312

石井十次顕彰会だより

第21号



高鍋町中央公園内に建つ「石井十次像」

1200人余りの孤児で一杯の岡山孤児院(明治39年・西暦1906年)

財団法人 石井十次顕彰会

第21回石

井十次賞

石井十次賞

社会福祉法人
思恩会 七窪思恩園 様

孤児救済を自らの天職と定め 五十年の生涯を捧げた児童社会福祉事業の先駆者 石井十次の人類愛と社会奉仕の崇高な精神を永遠に継続し 愛の心 思いやりの心を全国に広めるために石井十次賞を制定しました

貴七窪思恩園は創始者である五十嵐喜廣氏の示す「愛の精神」「恩恵の心（親師・社会・自然の四つの恩）」を理念として過去八十余年にわたり様々な家庭問題を抱える

児童の養護および健全育成、社会的自立に力を注がれこれまでで一千名を超える卒園生を社会にだされました
また近年では被虐待児や障害を持つ児童の入所割合が増えるなか 心理療法士や看護士を配属され心理的ケア及び医療的ケアの充実をはかれる一方生活単位の小規模化にも積極的に取り組んでおられます

このことはまさに石井十次の理念に沿った偉業であり心から敬意を表し ここに第二十一回石井十次賞を贈り功績をたたえます

平成二十四年四月十一日

財団法人 石井十次顕彰会
理事長 税田 格十



税田理事長より賞状を保科 直士 理事長へ



板山 賢治 選考委員の石井十次賞選考経過報告



謝辞を述べられる保科 直士 理事長



宇田津 士郎 副理事長より石井十次小伝の贈呈



楽しいクリスマス



なでしこコーラスによる石井十次の歌



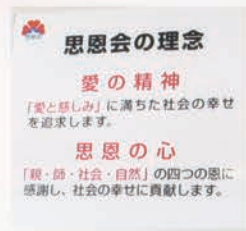
海岸の清掃活動



東日本震災の募金活動



創設者 五十嵐 喜廣 初代理事長



経営の理念



思恩会 保科 直士 理事長 七窪思恩園 佐藤 以中 園長



社会福祉法人 思恩会 七窪思恩園



地域との合同運動会

平成四年の第一回石井十次賞（北海道家庭学校）以来、第二十一回（社会福祉法人 思恩会 七窪思恩園）となり、平成二十四年四月十一日に、その贈呈式を行いました。
併せて、生誕記念式典の後発表していただいた小中高校生の文章をお届けします。

「第21回石井十次賞」受賞者紹介

「第21回石井十次賞」候補者募集を、平成23年12月末を期限として全国都道府県、政令指定都市の社会福祉協議会及び個人推薦人にお願ひしました。推薦していただいたその候補者のうちから、平成24年2月22日、東京都において選考委員会を開催し、審査の結果下記の施設に決定いたしました。



社会福祉法人 思恩会 七窪思恩園

理事長 保科直士

住所 山形県鶴岡市下川字窪畑1の288
TEL (0235)75-2230
FAX (0235)75-2257

【施設の紹介】

児童養護施設七窪思恩園は、昭和4年5月に、五十嵐 喜廣氏によって日本育児院の七窪分院として育児・養老事業を開始しており、昭和8年には救護法の制定により日本育児院より独立、七窪思恩園と改称し、昭和23年児童福祉法により児童養護施設七窪思恩園として認可されています。

財団法人思恩会は、創始者の五十嵐 喜廣氏の運営に当たっての理念「愛の精神」である「思恩の心（親・師・社会・自然の四つの恩）」を大切に、子どもからお年寄りまでが安心して暮らせることを実現するために、現在でもこの理念を中核として諸施設の経営のいたるところに現れています。いまでも、児童家庭支援・相談支援事業・子育て短期支援事業などが地域における養育サポートの要となっています。

また、高齢者も子どもも安心して暮らせる地域づくりを目指して、独居老人に対し配食サービスを行うなど、児童福祉の領域に留まらず地域福祉の実践者としての機能を果たしています。

七窪思恩園は、定員63名で県内の児童養護施設の中で最も古く、過去80余年間に様々な家庭の問題を抱える児童の養護及び健全育成、社会的自立に力を注ぎ、現在までに1,000名を超える卒業生を社会に送り出している。近年では、被虐待児や障害児などの入所割合が増加するなか、心理療法士や看護師の配置を行い心理的ケア及び医療的ケアの充実をはかりグループホーム的な生活単位の小規模化にも取り組みがなされている。

思恩会は、去る平成21年11月には、創立80年を迎え記念式典を挙行している。昨年の東日本震災での災害を受けた児童2名、高齢者5名を受け入れておられるし、現在、児童養護施設にも児童家庭支援センターを併設、養護老人ホーム、特別養護老人ホーム、在宅介護支援センター、ホームヘルパーセンター、小規模多機能型居宅介護事業所、地域交流サロンなどを設置運営、地域交流の福祉事業を展開されています。

思恩会広報「ふれあい」・並びに七窪思恩園広報などで運営の様子を広報活動として定期的に広くなされています。



石井十次先生から学んだこと

高鍋西小学校 5年 谷口 さくら

わたしたち高鍋西小学校では、1年生から6年生すべての学年で、石井十次先生のことを学習しています。

1年生では、「なわの帯」のことを学習しました。十次先生が7歳のときの秋祭りに、いじめられていた友達の松ちゃんのなわの帯と自分のお母さんが作ってくれたつむぎの帯とをとりかえました。それを聞いた十次のお母さんは我が子をおこることなく、「それは、いいことをしましたね。」と喜んでくれました。帯をとりかえた十次やそのお母さんはとてもやさしい人だと思いました。そして小さいころから人の役に立てるようにがんばっていたのがすごいと思いました。

4年生のときは、十次先生にかかわる俳句を一人一人作りました。わたしは「決意した こ児を救う 医書を焼く」という俳句を作りました。その場面が、わたしにとって一番印象に残ったからです。理由は、医者かこ児救さいに生きるかを悩んでいた十次先生は、両親の悲しみや、教えてくれた先生の反対もかぐごの上で、今まで使ってきた医学書をすべて焼いて、医者をきっぱりとやめ、こ児救さいに一生をささげたからです。その決意の強さが強く心に残りました。この十次先生の「世の中や人のためになることをしたい!」という思いに強く心をひかれ、わたしも人のためになることをしたいと思うようになりました。

西小学校では2月に「石井十次先生をしのぶ会」を全校で行います。そのときわたしは、6年生が発表する十次先生の劇の手話通やくをすることになりました。実際に会場に耳の聞こえない方がいらっしやるということを聞き、手話をいっしょうけんめいがんばり、自分なりにしっかり手話で伝えることができました。

このように様々なことを十次先生から学び、自分自身を成長させることができたように思います。そして4月からわたしは、高学年である5年生になりました。これまで学んできた十次先生の教え「信・愛・和」を心に、人を信じ、愛することができるよう、思いやりの心を持ち、友達となかよく協力して様々な活動ができるような高学年になりたいです。



大きな優しさと愛情

高鍋東中学校 3年 大木場 真 子

最近、私が読んだ本にこんな言葉がありました。『本当の優しさは、自分とはまったく関係ない人に優しくできること。思いやりを持てること。』笑顔で相手と接する。身近な人を大切にすること。ほんの少しの優しさは、とても大切なものです。しかし、そこからもっと大きく、もっと広く、たくさんの人に優しさをもつということは、とても難しいと思います。

私達の郷土の偉人である石井十次先生は、その広い優しさをもつ人です。石井十次先生のことをどんどん知っていくうちに、私はそう感じるようになりました。私自身相手を気遣いながら話したり、笑顔であいさつしたりするといった、相手の気持ちを考えることを意識してはいます。しかし、初対面の人に優しく話しかけることは、言い訳のようですが、緊張して上手く言葉が出てこないのが苦手です。そして何より、不安にかられ、勇気をだすことの出来ない自分がいるのです。

自分の夢を変え、孤児の子達に優しさを届け、父となる決意をした石井十次先生の勇気と深い思いやりには強く、心が打たれます。

人には一つずつ、心があります。世界一つしかない、他の誰のとも同じものではない心があります。たくさんの孤児達に優しさと、父としての愛情を届けた石井十次先生。先生はとても大きくて強い、心をもっていたのではないのでしょうか。私はそう思います。自分の信じる道を歩んでいける強さ、揺るがない強さ、愛情や優しさを広く届ける、大きな心をもっていたのではないかと思うのです。ただ、この強く大きな心はもともともっていたのではなく、たくさんの辛さ、悲しみの壁を越えてそうになったのではないかと私は思います。そして何より辛いこと、悲しいことの中にある、ほんの小さな優しさを知っていたのではないかと思うのです。

私の祖母は、戦争の話をしてくれます。毎日、おびえて暮らしていた日々、そんな中での優しさはとても大切に思えると、祖母は話していました。

昨年、日本は東日本大震災により、大変な状況に陥っています。その悲しみや辛さを乗り越えていくことは、とても大変です。しかし、そんな中にある小さな優しさと相手に対する愛情は、希望となり、越えていける力を与えてくれます。石井十次先生は、孤児の子供たちに愛情をもち、優しさを与え、子ども達の創造する未来に希望をもっていたのだと思います。私たちが受ける優しさや、愛情は未来への希望です。その希望を胸に私達も優しく生きていきたいと思っています。



石井十次に学んで

宮崎県立高鍋農業高等学校 農業科 3年 黒 木 通 宏

私は、これまで石井十次先生の名前を聞いたことはありましたが、具体的にどのような活動をした人なのかは知りませんでした。文献などで調べてみると想像以上にすばらしい行いをした、とてもすごい人であることが判りました。

その一つに、日露戦争で親を亡くした子ども達や東北地方の凶作による孤児を救済した活動があり、どんどん増加していく孤児のために、自分が医者になるための勉強する時間を惜しんで資金集めに奔走されたようです。自分を犠牲にして、他人のために何かをするということは本当にすごいことで、とても真似することができないと思いました。

また、孤児の教育にも取り組んでおられます。その中で、私がすごいと思ったのは「密室教育」です。これは自分の部屋に子どもを一人ずつ呼び、向かい合いながらその子どもの悩みを聞いてあげたり、自分の考えを伝えたりする教育です。

今、世の中の子ども達は、様々な悩みや苦しみをたくさんかかえています。薄れゆく人間関係の中で、誰にも相談することができずに一人で苦しんでいます。その結果、不登校になったり、最悪の場合は自ら命を絶ったりすることをよくテレビや新聞等でも目にします。

子どもが不登校になるのは、その子どもだけに原因があるわけではありません。不登校になる前に先生や保護者はもちろん、その子どもを取り巻く多くの人々が一人の子どもを育てるためにサポートしていくことが大切です。だからこそ石井十次先生が取り組んだ「密室教育」は、今の教育に絶対に必要不可欠なものだと思いました。

このようなすばらしい活動を知ると、石井十次先生が「人を愛する心」を持って様々な取り組みをされていることがわかります。自分の子どもでもない孤児に愛情を持って接し、教育を行い自立するまで育てておられます。私は、なぜ見ず知らずの人にここまで愛情を注げるのか今でも不思議でなりません。常に自分のことより他人の幸せを願っているからこそ、このような行動を起こすことができるのだと思います。

私自身、これから世の中のためにどのようなことができるかわかりませんが、石井十次先生から学んだことを生かして、どんな小さなことでも人のためになれるような活動を行っていきたいと思います。



The Great Person ~Ishii Juji

Takanabe-Higashi J.H.S.
3rd Grade. Yumi Yokoyama

When he was six or seven years of age, Juji was dressed by his mother in a new kimono with a fine belt for the harvest festival. "Now you look handsome! Why don't you go outside and play?" said his mother. Juji ran over to the shrine, his heart beating with joy. A small boy was sobbing near the gate of the shrine. "What's wrong, Matsukichi?" Juji asked. But he guessed from the way Matsukichi was dressed humbly in a torn kimono with a rope for a belt, that he was being snubbed by his friends. "Stop crying, Matsukichi, I'll give you my belt," said Juji, taking off his belt for Matsukichi. Then he led Matsukichi over to his friends, to join them and play.

In the evening, Juji went home only to be asked by his mother what had become of his belt. Juji told her the truth honestly, though he feared that he might be scolded for what he had done. But his mother gave him a gentle smile, and said. "Is that right? Good for you. Matsukichi must have been very happy." His mother's response inspired Juji to begin his volunteer work.

This is the well known story about Ishii Juji. As you know, he is one of the greatest people from Takanabe. I have often been taught Mr. Ishii's teachings since my childhood. Now I respect him and I'm very proud of him.

There are words Mr. Ishii left: 信— To believe in each other, 愛— To love each other, 和— To live together in harmony. I always keep them in mind, and I try to do my best to be a useful person for society.

偉人 石井十次

高鍋東中学校 3年 横山 有美

石井十次は6歳か7歳の頃、秋祭りのために母親から新しい着物と帯を着せてもらいました。「ほら、とてもよく似合っているわよ。外で遊んでらっしゃい。」と母親が言いました。十次は、すぐに神社へと向かいました。彼は胸をはずませ天神さまに向かいました。すると鳥居のそばで小さな男の子がしくしく泣いていました。「松吉どうしたんだい。」と十次は聞きました。十次は、松吉がやぶれた着物を着て、なわの帯をしめているので、のけものにされているのだと察しがつきました。「泣くな、松吉。」「お前にほくの帯をあげるよ。」そう言って自分の帯と松吉の帯をとりかえました。それから松吉を連れて行き、皆と遊びました。

その日の夕方、十次は、自分の着物の帯のないことを母にとがめられるであろうと思いながらも、その理由を正直に話しました。しかし母親は穏やかに微笑んでこう言いました。「あら、本当。いいことをしたわね。松吉もきっと喜んだでしょう。」母のこのような言葉は、十次がボランティア活動を始めていくきっかけとなりました。

この話は、石井十次の物語として広く知られています。皆さんもご存じのように石井十次は、郷土高鍋の偉人の一人であります。私は子どもの頃から、十次の教えを色々な機会を通して学んできました。そして、現在、十次をととても尊敬していますし、誇りに思っています。

ここに十次が残したとても素晴らしい言葉があります。

「信」 互いを信じ合うこと。

「愛」 互いに愛し合うこと。

「和」 共に助け合い生きること。

私はこの言葉をいつも自分の心にとめ、世の中の役に立つ人になるよう最善を尽くしていきたいと思っています。



My thoughts on Ishii Juji

Takanabe-Nishi J. H. S.
3rd Grade. Yousuke Kurogi

After taking on the first child, "Sadaishi", Ishii juji went on to save the lives of hundreds and thousands of homeless or abandoned children.

Something happened when he was very young, to start him on the road to helping children. When he was six or seven years old, he was wearing a new belt that his mother had made for him, at an autumn festival. He saw a small boy crying at the gate of a shrine. He knew that the boy was being shunned by his friends, because he was wearing a belt made out of rope. He put his own new belt on the boy instead. I think that ever since that time, Juji felt a need to care for people in trouble.

Ishii Juji burnt all his medical notes and textbooks, and quit his medical career. He had studied hard for six years and worked only two years as a doctor. "Many people aim to become a doctor, but there are few people who aim to save children in need", he thought. Who else could do that? To think only of others and not of themselves, before 'volunteering' was popular? I think Ishii Juji was special.

Five or six children, soon became ten, thirty, fifty, and one hundred. One day, when there was no food left, Ishii Juji gave the children watered-down rice, and took nothing himself. I think he was a strong and great man. The children of his orphanage grew up to be useful members of society. He taught them Japanese, math and calligraphy in the mornings and real work skills in the afternoons. When some children fought, told lies or stole things, he had long talks with them.

Ishii Juji returned about four hundred abandoned children to their parents, and moved the orphanage from Okayama to Chausubaru in Miyazaki.

Ishii Juji became very ill. He took his last breath on January thirty-first, 1914.

These days, there are more and more people who think only of themselves, even when others are in trouble. We hear of bullying in schools, and people treating their own children badly. Nowadays too, we should listen to Ishii Juji. No matter how good our intentions, we cannot help others without the strength and belief to carry actions through.

石井十次先生についての私の考え

高鍋西中学校 3年 黒木陽介

石井十次先生は、最初の孤児「定一」を引き取り、そこから何百人、何千人という孤児の命を救いました。

その全てのきっかけは、十次先生がまだ小さいときの出来事だと思います。先生が6歳か7歳のころのことです。秋祭りのとき、十次先生は母親の織った新しい帯をしめていました。神社の鳥居のそばで、泣いている子がいました。泣いている訳を聞くと、縄の帯をしめているので、のけものにされていることが分かりました。そのことを知った十次先生は、自分とその子の帯を取り換えました。このときから十次先生は、困っている人を助ける必要性を感じていたと思います。

石井十次先生は、6年間必死に勉強して、あと2年すれば医師として働けるところまでになっていました。しかし、「医師を目指すものは多いが、あわれな子を救う者はいない」と考え、医学書やノートを全て焼き捨て、医師への道を諦めました。自分の利益を考えず、他の人のために尽くす「ボランティア」という言葉すらなかった時代に、こんな決断が出来た人が他にいたでしょうか。僕は、十次先生だったから出来たことだと思います。

5、6人だった孤児の数は、たちまち10人、30人、50人、100人と増えていきました。あるとき、食糧がほとんどなくなりました。そんなとき、先生は、子どもたちに薄いかゆを食べさせ、自分は何も食べませんでした。僕は、石井十次先生は辛抱強く、偉大な人物だと思います。孤児院の子どもたちもやがて大きくなり、社会の一員となります。先生は、午前中は、国語、算数、習字を、午後は、実際に働く技術を教えました。子どもの中には乱暴したり、うそをついたり、盗みを働く子さえいました。そんなときは、何時間も話し合いました。

十次先生は、およそ400人の子どもたちを親元に返しました。そして孤児院を岡山から宮崎県の茶臼原に移しました。

それから、石井十次先生は重い病気にかかり、1914年1月31日に息を引き取りました。

最近は、困っている人がいても、自分の利益だけを考えて行動する人が増えています。また、我が子を虐待したり、学校でのいじめも増えている傾向にあります。どんなに優しい気持ちを持っていても、やり通す信念や忍耐力がなければ人を助けることはできません。こんないまだからこそ、石井十次先生の生き方を学ぶ必要があると僕は思います。